新兵庫学

自然の旅人

ふるさと知の紀行 <34>

鉢伏草原のチョウ

絶滅の危機に守る会

地元、県も協力 氷河期の命甦る

もう、四十年にもなる。朝早く公園を登った。たどりついた砥峰高原は、一面、霧の海だった。白い世界が明るさを増すと、明祈者たちの夢ひろ跡が浮かび上がる。牧場だったのか、牛舎かサイロもある。やがて広大な草原に光が差し込み、足元からワッと四羽ほどの、焦げ茶とオレンジのチョウが飛び立った。ウスイロヒョウモンモドキ（以下ウスイロ）。兵庫県以西の中国山地に分布し「氷河時代の遺物」とも呼ばれる珍しいチョウだった。

六〇年代には、こうした生息地が西播や但馬に点在していた。しかし、高度成長期に草原が減り、チョウも姿を消した。

現在、県内生息地は但馬の鉢伏山（一、二三二メートル）付近だけ。ここでも絶滅寸前だったが、アマチュアの研究者らが地元や県と協力し「草原とチョウの復活」に励んでいる。

■研究者が集まった

二〇〇〇年七月、昆虫の分布や生態を調べる「兵庫昆虫同好会」の近藤一（神戸市在住）、立岩幸雄（加古川市）らの元へ電話が入った。

「ウスイロの現状はいかがですか。絶滅の心配はないですか」

環境省の委託を受け、レッドデータブックなどを手掛けていた「自然環境研究センター」の中村康弘さんからだった。チョウとその生息環境の保全に強い関心を寄せていた。但馬の自然を調べていた専門家と確認すると、手分けして声を掛けてきた。

早速十五日、県民会館に七人が集まり、情報交換した。県立人と自然の博物館の、昆虫の系統分類学者中西徳さんも。

四月に、昆虫類について「環境省のレッドデータブック」が公表され、ウスイロは最も危険な「絶滅危惧Ⅰ類」とされたが、県内でも同様であることが確認された。中村さんは、その足で生息地の調査に入った。

中村は生息が知られた島取、島根、岡山、広島の研究者にも電話をかけ、二月、松江で「ウスイロの現状と保護」と題したシンポジウムが開かれた。参加者は各県の状況が明らかになる。

■ウスイロは中国地方、朝鮮半島と日本の中国山地に分布。二百万年前から二万年前の氷河時代、大陸と地続きだった時に、日本へ分布を広げた。寒冷で、草原が広がっていた時代だ。

だが、日本の氷河は本来、森林が優勢だ。わずかに残った草原で、幼虫はオミナエシなどの葉を食べて生き残った。

会場は、各県の研究者らが現状を報告した。広島では七〇年代前半に絶滅。確実な生息地は島根一、鳥取二、岡山三、兵庫で二カ所となっていた。

■鉢伏スキー場が幸い

分布の重要性は、兵庫については近藤が説明した。合併前の旧十四町で採集記録があるが、生息地は、西播の山地、丹波・南光・佐用・千種・波賀では、七〇年代に姿を消した。生野・一宮では八〇年代初頭を最後に、但馬では但温泉町で九〇年ごろ以降に消滅。鉢伏周辺だけに、ほそぼそと生き残っているとされた。

絶滅または激減の原因を、パターンごとに説明した。

波賀の東山高原は、一九六八年ごろは明るい温地の周辺に湿原があり、環境は豊かだった。だが湿地が乾燥し、木が茂って暗くなり、八〇年代に絶滅。但温泉町の小山高原は、ゴルフ場の建設で土地が大幅に改変されて、他の四県と比べると、兵庫は、失われた所もあった。

だが、近藤は報告しながら、他の四県と比べると、兵庫は、まだまし」と感じた。

冬の季節風が強い山上なために本古からの自然草原が残り、人間が草刈りや火入れ（野焼き）をして、保たれてきた。加えて但馬では、放牧で、草原が近年まで維持されていた。

さらに、そうした放牧場が六〇年代、スキー場になった。少しずらしの凸凹は、そのままにし、草原の管理も行われた。

幼虫が葉や花を食べるオミナエシは、背の高い草や木に近いやられることなく育ち、チョウの命をつないだ。

だが近年、そのスキー場にも大型機械が入って、改変され、状況は変わったという。

■採集自粛を呼び掛け

わずかに残った所へ、県内外のチョウマニアが殺到する。ウスイロは比べっくり飛び、簡単に網に入る。県内外の絶滅も、目の前まで来ていた。

立岩は「〇〇年夏、確実な産地である鉢伏山に写真を撮りに入った。途中で出会った男は「見かけなのは全部採った。写真なんか撮れないよ」。勝ち誇ったように言った。

確かにまくいかなかった。「何とかしなくては」と思った瞬間だった。「仲間に呼び掛け、採集に訪れた方二人に直接を訴えたが、「何の権限で」と無視された。地元の区長に相談し、区長のチョウマニアが殺到する。ウスイロは比べっくり飛び、簡単に網に入る。県内外の絶滅も、目の前まで来ていた。

立岩は「〇〇年夏、確実な産地である鉢伏山に写真を撮りに入った。途中で出会った男は「見かけなのは全部採った。写真なんか撮れないよ」。勝ち誇ったように言った。

確かにまくいかなかった。「何とかしなくては」と思った瞬間だった。「仲間に呼び掛け、採集に訪れた方二人に直接を訴えたが、「何の権限で」と無視された。地元の区長に相談し、区長が「採集自粛」の立て札を十枚設けた。それでもマニアは入った。

■小さな努力がつながった

〇四年には、近藤や立岩、中西、中村らで「兵庫ウスイロを守る会」を結成。会長は、地元の観光協会長田中宏さんが引き受けた。

生態を調べ、幼虫が越冬のために枯れ葉に入った後に、草を刈るよう但馬県民局に頼んだ。刈るのも根際ではなく、数十センチ残してもらった。「密猟者」がいないか、交代で見張った。

わずかなこのウスイロが、年を追って数を増やしはじめた。獣ふんに場所を求めて、十数匹が群がったこともあった。

県の振興で、住民がオミナエシを植かう育てることに成功した。みんなの山に感謝した。

観察会を開き、子どもたちに希少種の危うさと、減りつつある現状を見てもらった。中村は「日本でチョウを守る運動を」と、二〇〇〇年、英国に渡った。チョウの保護運動が野鳥同様に盛んな地で、半年間勉強した。〇四年、「日本チョウ類保全協会」を設立。各地と連携を図りながら、新たなジャンルに情熱を燃やしている。絶滅寸前のチョウは、まだまだいる。

ウスイロは今年七月、自然公園の特別地域（大山隠岐国立公園、氷ノ山後山那岐山国定公園）で採集が禁止となった「指定動物」となった。よりやく法に守られたのだ。

（敬称略）

（編集委員・三木 進）

鉢伏山に戻ったウスイロヒョウモンモドキ。保全への努力の成果だ（撮影・中西大二）

原図・日本チョウ類保全協会

次回は「阪本勝の但馬愛」